

氏 名	吉 田 幸 子
学 位 の 種 類	博 士 (美 術)
学 位 記 番 号	博 美 第 254 号
学位授与年月日	平 成 21 年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈作品〉情景の変容 〈論文〉陶における情景の変容
論文等審査委員	
(主査)	東京芸術大学 教 授 (美術学部) 豊 福 誠
(論文第 1 副査)	〃 〃 (〃) 佐 藤 道 信
(作品第 1 副査)	〃 〃 (〃) 島 田 文 雄
(副査)	〃 〃 (〃) 橋 本 明 夫
(〃)	東京国立近代美術館 工芸課長 金 子 賢 治

(論文内容の要旨)

身近にある土・石・灰などの自然の物質が陶芸として焼成されると、全く別の物質に変化する。本焼をすることで素地は焼き締まり、長石や灰はガラス化する。また、焼成温度・焼成時間・焼成雰囲気（酸化炎・中性炎・還元炎）・冷却速度などの条件で、作品の性質や外観は大きく変化する。

陶芸の技術とシステムは、各地で長い歴史を経て、それぞれに最適な形式が確立されている。そのため逆にイメージが固定しているし、また構造と素材と形態の密接な関係から、出来る形態が類型的になりやすい。それはそれで、伝統として重んじるべきものであるが、同時に情報・物流が簡便になった今日、どこにいてもある程度似たものができるようになりつつある。

伝統的な技術は、それ自体が「技のかたち」として鑑賞の対象となり、実用を離れた領域を創造できる。しかし、使うという意識の欠如は、ものの性格を希薄化させるため、存在価値を保つには、作品の芸術性が重要になってきている。

現代の生活では、壺は主に鑑賞物として扱われ、容器としての使い易さを形態にすることが第一に求められるわけではなくなってきた。形態が同じでも、異なる目的が発生してきたのである。すなわち、実用的な用途ではなく、精神的な用途が求められるようになってきたのである。陶芸を用いて自己表現すること、工芸としての鑑賞価値を失わないこと、この 2 つが重要視されてきていると考えている。

陶芸は、形態や文様の持つ動きが直接鑑賞者の視覚に訴えかけることで、イメージをより強く喚起することができる。文字社会の現代において、鑑賞者の思考はイメージを造形で訴えることによって刺激されるだろう。鑑賞者は、造形の構成を目で追いながら、抽象モチーフから具象的な形象を想像するのである。

また、ある程度の知識が必要な古陶磁とは違い、新たに創作した作品は鑑賞者と対峙し精神的に同じレベルに立つ。作品は、鑑賞者の感性と知性に訴え、新たな感情を引き出すことができる。

本研究では、自然の色彩・形態を図像へと変容しようとする試みと、陶器を生活用具から魅せる対象物にする工芸技法の追求について論じ、その必然性、意義について考察した。

(博士論文審査結果の要旨)

空や水は、かたちを持たない。一方、陶芸は、絵画のような情景の再現イリュージョンには向いてい

ない。本論文は、用を離れた陶芸は、自己表現と、鑑賞者の思考の刺激と感動をめざすべきだと考える筆者が、彼女が魅かれる空と水の青を、陶芸で表現しようとする試みについて論考したものである。

陶芸は、自然（土、石、灰）と人間の共同制作である。染付技法の体験で青の美しさに魅かれた筆者は、空や水の青に魅かれてきた自身を再確認し、その自然の青を陶芸で表現する方法を模索する。ここで古来、空や水は背景として多く描かれ、単体でそれを表す時には記号化や文様化されてきたこと、そして現代の風景での空や水は、建物の線で区切られていることに気づき、それを抽象化した形態として記号化することを思いつく。この抽象化の過程で筆者の記憶から浮上したのが、幼少時に見た縄文土器の抽象文様の強烈なエネルギーと、イメージの喚起力だった。具象形態より抽象化された文様や記号の方が、観者の想像と思考を刺激する。ビルの線に区切られた空や水の青を、抽象化した形態として陶に表現すること、これが、筆者が作品、論文とともにタイトルとした「情景の変容」である。作品の器形が、曲面ではなく直面的であることや、ときに器形じたいが建物のような形をしているのも、現代風景としての空や水のあり方を映し出しているのだろう。また成形に、ひも状の粘土を重ねていく縄文土器の成形方法を用いているのも、縄文土器への共感と、そこに秘められたイメージ喚起力を、現代の自身の陶芸に込めたい思いからなのかもしれない。

論述には、実制作者ならではの造形の解釈や表現への言い回しが各所にあり、審査員からの共感の声が少なくなかった。かたちにならないものをかたちで伝える工夫、自然と自己と鑑賞者の間に表現のあり方を考察した好論として、高く評価できる。

（作品審査結果の要旨）

吉田幸子の作品「情景の変容」は、陶素材を用いて自らの考える工芸に、正面から取り組んだ吉田自身の解答である。

吉田は1999年本学工芸科に入学後1年半、工芸の基礎造形を学び、2年後半より陶芸を専攻した。陶芸の基礎実技として、論文中に述べている様にロクロ成形を基本から習得し、卒業制作では、染付大皿「水の中」を制作した。大学院1年時には、自分達で設計した炭化窯の築炉実習と焼成を行い、修了制作では、論文で取り上げた「floating」というオブジェ作品を提出した。博士課程では、修士課程に行った研究をいっそう深め、成形・彩色・釉薬・焼成など制作に関するすべての技法に、新しい試みを行い、完成させている。

博士課程修了作品とした、5点の連作は、都市の夜景をモチーフに、単に風景描写ではなく、鑑賞者に情景の喚起を促すための、作者自身の心象風景を表現したものである。

一見、黒色にも深い灰色にも見える夜空の表現には、吉田がこだわり続け追求した青の彩色を施し、光（照明）のあて方によって、鈍い青の光を放ち、かすかに青く、つき抜けて行くような錯覚をさそうのである。

又、その形に視線を転じると、側面一つ一つに微妙な膨らみのある、多面体の器形が、建造物のような全体感をもつ立体である。この微妙な膨らみは、中国宜興の急須作りからヒントを得て、吉田独自の密閉成形（口を閉じた風船のような状態で、形を作る）により表現されている。上面には開口部があり、それぞれの器に違う形の口がつく、この口は内側に空間が存在することを示す重要な役割を果たしている。開口部は剣先という道具を使って切り取るように開けるが、粘土の収縮によって高まった内圧のため最初の一刺しで、内側の空気が音をたてて吹き出し、その瞬間器形はホッと溜息をついた様な、安堵した形となる。これらの口は、作品に用途を付加するのではなく、内側にある空間の存在を明らかにし、表裏一体の立体であることを強く主張している。

酸化焰焼成の後、還元状態である温度まで、ゆっくりと冷ます独自の焼成方法により、吉田独特の色を表現し、完成度の高い作品に仕上げている。作者のこだわりと、長年の研究の積み重ねが優れた作品

を生み出す原動力となっており、更なるこだわりが展開して行く事を期待したい。

(総合審査結果の要旨)

昨今、陶芸の表現領域はその素材・成形・焼成などの制作法を含め、幅広いものとなってきたが、吉田幸子は学部、修士課程、博士課程を通じ、陶芸素材である陶土と向き合い、伝統技法を踏まえて意欲的に制作に取り組んできた。特に修士課程からは、「Floating」・「Metamorphose」といった言葉で表わされる、制作テーマの追求と、自己作品の工芸的位置づけについての表現を研究し、本論文「陶における情景の変容」と作品「情景の変容」により一つの結論を提示した。

第一章では彼女が、成形技法において強い影響を受けた、縄文土器をとりあげ、抽象表現がもたらす効果について考察していた。子供の頃の縄文土器との出会いと、衝撃から始まり、縄文土器調査研究の考古学者からの指導を受け、その資料を基に彼女なりの論考を行っている。又、成型技法・表面に施されたマチエール・意匠・抽象表現など、自作品との共通性を見出し、作品に反映させている。

第二章では作品に用いた「青」の表現について、自然界にある青から、陶芸に用いる青、色彩学的な青に至るまで考察し、彼女の「青」への強い思いを述べ、実作品では研究を重ねた顔料を用いて深みのある「青」の表現に成功している。

第三章の第一節では、自己と素材である陶土を「人為」と「自然」と捉え、人為と自然のかかわりの重要性和陶芸素材ならではの表現効果について、彼女独特の文章表現によってそれぞれに表され、興味深い論述となっている。又、第二節では作品の表面に彼女が表現した、風景（夜景）の意図として、空や水といった形のないものの表現への取り組みについて、「線」・「情景の喚起」・「文様化の意味」などのテーマに分けて述べ、作品の意を理解するに足る、充実した内容となっている。

第四章の制作過程と技法については、実制作者ならではの、制作の情景を思い浮かべることが出来るぐらい、十分な内容となっている。

以上のように論文と作品が表裏一体ともいえる関係をもち、制作、論述が進むにつれて、それぞれを深めあいながら結実した成果として、高く評価し課程博士の学位授与にふさわしい内容と判断した。